

手作り玩具製作を通した保育者としての基本的態度の変容についての一考察

A study on the change of basic attitude as nursery teacher through the production of handmade toys

小西 眞弓

Mayumi KONISHI

要旨

本研究では、本学で「乳児保育Ⅰ」を受講する学生が手作り玩具製作を通して、子どもへの理解や保育者として必要な態度や保育者基礎力がどのように変化しているかを把握するために、記名式アンケート調査を実施した。その結果、手作り玩具製作前と手作り玩具製作後では、「日常的に目にする保護者と乳幼児の姿」5項目では、「乳幼児を持つ保護者の様子を見る機会がある」、「保育所や幼稚園でどのように育てられているか考えることがある」の2項目で有意な差がみられた。「保育者として必要な態度」6項目のうち、「使命感をもって子どもと接することができる」、「家事や料理・洗濯など、自らの生活体験を活かした保育を行うことができる」、「保育者自身の豊かな遊び体験を保育に活かすことができる」、「保育者自身の自然にふれあう体験を保育に活かすことができる」の4項目で有意な差がみられた。「保育者基礎力」6項目のうち、「ていねいにきれいな字を書くことができる」、「相手の持つ力を信じ、頼ることができる」、「子どもや他者に寛容さをもって接することができる」の3項目で有意な差がみられた。また、手作り玩具製作後に取り組むべき課題についての自由記述をSCATの手法で分析した結果、「子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化」と「保育者になるための保育技術の習得」という課題が示されたことから、子どもの発達過程の理解の促進や実践的な知識と技術の習得を目指し、授業と学生自らの体験を連動させる必要があると考えられた。

キーワード：乳児保育、保育者として必要な態度、保育者基礎力、SCAT

I. 緒言

現行の保育士養成課程における教科目「乳児保育Ⅰ」及び「乳児保育Ⅱ」は、保育を取り巻く社会情勢の変化、『保育所保育指針（平成29年告示）』（厚生労働省、2017）の改定等を踏まえ、より実践力のある保育士の養成に向けて、課程教科目の見直しが行われ、2019（平成31）年4月1日より適用されることになった。本学においても2020（令和2）年度より、理念や現状、体制など基本的事項の理解を深めた上で、具体的な保育の方法や環境の構成等を学び、保育の実践力を習得させるべく「乳児保育Ⅰ（講義2単位）」及び「乳児保育Ⅱ（演習1単位）」が行われている。

「乳児保育Ⅰ」では乳児保育の意義・目的と歴史的変遷及び役割等を理解しつつ、保育所や乳児院等多様な保育の場における乳児保育の現状と課題について理解する。また、3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容や運営体制について理解し、職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携について理解するなどが目標と

してあげられる。さらに、「乳児保育Ⅱ」においては3歳未満児の発育・発達過程や特性を踏まえた援助や関わりの基本的な考え方について理解し、養護と教育の一体性を踏まえ子どもの生活や遊びと保育の方法と環境について具体的に理解することなど、実践的な知識と技術を身につけることを目指している。3歳未満児の発育・発達を学ぶ過程で将来保育者として現場に立った時に、保育者に課せられた役割や専門性を理解していることが、多様な視点をもち子どもの最善の利益を考慮する保育を展開できる鍵になるであろう。今回の改定では、3歳未満児の保育の重要性が強調され、乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載が充実されている。社会的背景や歴史的経緯を理解した上で現在の保育制度や政策を学ぶことや、子どもの保育とともに保育所を利用する保護者、地域の保護者等に対する子育て支援など、その充実が求められている。

子どもの発達を踏まえた上で意欲や興味を大切にできるような環境を提供することは、新任保育士であっても早い段階から保育実践の場で求められる。筆者は長年の保育現場での経験から、子どもが身近な環境に興味や好奇心をもって関わるができるよう、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使った遊びが楽しめる手作り玩具の製作に取り組んでいる。子どもの成長発達に合わせた玩具を製作し、遊びを通して様々な手指の動きが促されることや、玩具を提供する際に衛生面や安全面の管理を適切に行うことは、将来自らの専門性を活かすことにつながる。実際に手作り玩具を製作することで、これから大学生活において習得すべき技術の獲得や改善点などに加え、保育者としての適性や必要な態度、構えが育っているかを見定める契機になると思われる。

そこで、本稿においては、手作り玩具製作に関するアンケート調査を行い、子どもへの理解や保育者として必要な態度、保育者基礎力がどの程度育っているかを明らかにし、今後の乳児保育の授業の資料とすることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象

2019 及び 2020 年度入学生（乳児保育Ⅰ受講者）22 名を対象とした。内訳は人間教育学専攻小学校専修 2 名、人間教育学専攻幼稚園専修 20 名であった。

2. 研究方法

手作り玩具製作を製作する前と製作後の気持ちや態度について記名式質問紙調査アンケートを作成した。2021 年 7 月 18 日から 7 月 21 日の期間に Active Academy Advance を利用して「手作り玩具製作に関するアンケート」について回答を依頼した。

手作り玩具製作前の調査項目のうち、①「日常的に目にする保護者と乳幼児の姿」については 5 件法 5 項目からなる自作の評価表を用いた。②「手作り玩具製作する場合に気をつけたいこと」については、「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2016）、「保育所における感染症対策ガイドライン（2018 年改訂版）」（厚生労働省、2018）を参考に作成した 5 件法 5 項目からなる評価表を用いた。③「保育者として必要な態度」については、「平成 24 年度専門委員会課題研究報告書」（全国保育士養成協議会、2013）から「保育者として求められる内面的要素」6 項目を抜粋して作成した 5 件法の評価表を用いた。④「保育者基礎力」については、同報告書から「保育者基礎力の獲得時期に関する質問」26 項目のうち 6 項目を抜粋した 5 件法の評価表を用いた。

手作り玩具製作後の調査項目では①から④の内容に⑤「乳児期の子どもの発達を踏まえた手作り玩具製作を通して、これからあなたが取り組むべき課題は何だと思いますか？」という質問項目を追加し自由記述を求めた。①②

③④の回答の方法は、各項目の内容が学生自身にあてはまるかどうかについて、「あてはまらない（1点）～あてはまる（5点）」までの5件法で求め、各項目の総合点で評価した。

なお、分析方法は手作り玩具製作前後の①②③④の各項目のアンケートの総得点の平均値を求め、MicrosoftのExcel分析ツールを使用してWilcoxonの符号順位検定を用いて比較（有意基準は5%未満とした）を行った。

自由記述の分析については、「乳児期の子どもの発達を踏まえた手作り玩具製作を通して、これからあなたが取り組むべき課題は何だと思いますか？」という質問で得られた回答をテキストデータとして用いた。テキストデータに対してSCAT（大谷、2007・2011）活用法の一つ（福士・名郷、2011）を用いて分析を行った。SCAT（Steps for Coding and Theorization）の手法はアンケートの自由記述などの比較的小さな質的データ分析にも有効であり、分析手続きの明示化がなされていることや、明示された作業手続きにしたがって作業することで、分析に必要な初段階を経て理論化に至ることが可能であるとされる。本研究では、ひとつの回答記述をひとつのセグメントとみなしてテキスト欄に書き込んでいき、〈1〉から〈4〉に向かって段階的にコーディングし、その後〈4〉を考慮に入れつつ、各行をグループ化する形で縦方向に並べ替え、再度、すべての行の〈1〉から〈4〉までを検討し直し、最終的な〈4〉のテーマ・構成概念に基づいてストーリーラインと理論を記述するという分析手順で行った。

3. 倫理的配慮

記名式自記式質問紙調査を実施するにあたり、倫理的配慮として「乳児保育Ⅰ」を受講する学生に、アンケート調査の目的、方法、意義、守秘義務、研究の協力及び協力拒否が可能であること、回答は統計的に処理され研究終了後破棄すること、成績評価とは全く関係ないこと、アンケートの結果については「乳児保育Ⅱ」の授業で公表することをActive Academy Advanceにて説明を行い、アンケート調査票の提出をもって研究協力への同意を得た。アンケートに記名式を用いたのは、「授業を進める中で、授業で取り扱う内容に関する調査を学生を対象に実施し、授業で公表することにより、授業内容をより身近に感じさせる動機付け」（篠原、2020）になることや、後期に実施される「乳児保育Ⅱ」の授業内容等の見直しにつながると考えたからである。

Ⅲ. 結果

1. 回収率

回収率は20名、91%であった。自由記述の有効回答は18であった。

2. 手作り玩具製作前後における、「日常的に目にする保護者と乳幼児の姿」「手作り玩具を製作する場合に気をつけたいこと」「保育者として必要な態度」「保育者基礎力」の変化

手作り玩具製作前後の質問内容の変化については、表1に示す。「日常的に目にする保護者と乳幼児の姿」では、「A. 乳幼児をもつ保護者の様子を見る機会がある」（ $Z=-2.551$, $p<.01$ ）、「E. 保育所や幼稚園でどのように育てられているか考えることがある」（ $Z=-3.180$, $p<.001$ ）の項目で有意な差がみられた。「手作り玩具を製作する場合に気をつけたいこと」においては、手作り玩具製作前と手作り玩具製作後では有意な差はみられなかった。また、「保育者として必要な態度」のうち、「A. 使命感をもって子どもと接することができる」（ $Z=-2.521$, $p<.01$ ）、「D. 家事や料理・洗濯など、自らの生活体験を活かした保育を行うことができる」（ $Z=-2.521$, $p<.01$ ）、「E. 保育者自身の豊かな遊び体験を保育に活かすことができる」（ $Z=-2.760$, $p<.01$ ）、「F. 保育者自身の自然にふれあう体験を保育に活かすことができる」（ $Z=-2.803$, $p<.01$ ）の項目で有意な差がみられた。さらに、「保育者基礎力」では、「C. ていねいにきれいな字をかくことができる」（ $Z=-2.934$, $p<.01$ ）、「E. 相手の持つ力を信じ、頼ることがで

きる」($Z=-2.073$, $p<.05$)、「F. 子どもや他者に寛容さをもって接することができる」($Z=-2.366$, $p<.05$)の項目で有意な差がみられた。

表1 手作り玩具製作前と手作り玩具製作後の Wilcoxon の符号順位検定の結果

	平均値（標準偏差）		Z値	有意確率 （両側）
	製作前 n = 20	製作後 n = 20		
Ⅰ 日常的に目にする保護者と乳幼児の姿				
A. 乳幼児を持つ保護者の様子を見る機会がある	2.85(1.39)	3.75(1.22)	-2.551	p<.01
B. 乳幼児を連れた保護者がスマホを操作していると気になる	4.15(0.96)	4.40(0.97)	-0.338	n.s.
C. 乳幼児が泣いていると気になる	4.70(0.56)	4.40(0.97)	-0.447	n.s.
D. 乳幼児の生活について関心をもっている	4.50(0.59)	4.75(0.54)	-1.690	n.s.
E. 保育所や幼稚園でどのように育てられているか考えることがある	3.75(0.94)	4.60(0.80)	-3.180	p<.001
Ⅱ 手作り玩具を製作する場合に気をつけたいこと				
A. 口に入れると咽頭部や気管が詰まる等窒息の可能性のある大きさや形状の玩具にならないように気をつける	4.65(0.65)	4.35(0.73)	-1.677	n.s.
B. 手指を使う玩具には、部品が外れないように工夫する	4.65(0.48)	4.60(0.58)	-0.338	n.s.
C. 直接口に触れる乳幼児の玩具については、乳幼児が遊んだ後、湯等で洗えるように意識する	3.80(1.03)	4.05(1.07)	-0.756	n.s.
D. 指先が発達する時期なので、指先の操作が伴う遊びを促すようなものや、子どもが喜びそうなまごことにつかうもの	4.80(0.40)	4.90(0.30)	-0.913	n.s.
E. これまでに窒息事故の事例があるものと類似の形状にならないように配慮する	3.75(1.18)	3.60(1.36)	-0.126	n.s.
Ⅲ 保育者として必要な態度				
A. 使命感をもって子どもと接することができる	4.15(0.85)	4.60(0.58)	-2.521	p<.01
B. 子どもの成長に喜びを感じることができる	4.85(0.36)	4.90(0.30)	-1.000	n.s.
C. 他者に愛情や思いやりをもって接することができる	4.75(0.57)	4.75(0.34)	-0.913	n.s.
D. 家事や料理・洗濯など、自らの生活体験を活かした保育を行うことができる	3.85(1.06)	4.35(0.85)	-2.521	p<.01
E. 保育者自身の豊かな遊び体験を保育に活かすことができる	3.95(0.92)	4.60(0.80)	-2.760	p<.01
F. 保育者自身の自然にふれあう体験を保育に活かすことができる	3.95(1.07)	4.50(0.92)	-2.803	p<.01
Ⅳ 保育者基礎力				
A. 時間や期限を守ることができる	4.65(0.57)	4.85(0.36)	-1.826	n.s.
B. 常に身だしなみは清潔感があるように心がけることができる	4.55(0.59)	4.75(0.43)	-1.468	n.s.
C. ていねいにきれいな字を書くことができる	3.80(0.87)	4.45(0.50)	-2.934	p<.01
D. 言葉遣いやマナーに配慮して行動することができる	4.45(0.67)	4.60(0.58)	-1.604	n.s.
E. 相手の持つ力を信じ、頼ることができる	4.25(0.62)	4.60(0.58)	-2.073	p<.05
F. 子どもや他者に寛容さをもって接することができる	4.35(0.73)	4.70(0.46)	-2.366	p<.05

3. 乳児期の子どもの発達を踏まえた手作り玩具製作を通して、これから取り組むべき課題に関する自由記述について

「乳児期の子どもの発達を踏まえた手作り玩具製作を通して、これからあなたが取り組むべき課題は何だと思いますか？」という質問に対する自由記述（有効回答は18）については、SCAT の手続きに基づいて分析を行った結果が表2である。紙面の関係上、抜粋して資料として掲載する。

表2 学生の自由記述 これから取り組むべき課題について SCAT による分析（抜粋）

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
1	学生1	私が、これから取り組むべきこととして「幼児の目線に立って考えることができるようになる。」ということである。どのような工夫をすることで、玩具に興味を持つかが重要であると考えている。また、指先が発達する時期なので、指先の操作が伴う遊びを促すようなもの。さらに、玩具だけでなく子どもが喜びそうなものをつくるのが大切であると感じたからである。また、幼児の発達段階を理解することが私の課題である。	幼児の目線に立つ、工夫をする、玩具に興味を持つ、指先が発達する時期、指先の操作、子どもが喜びそうなもの、幼児の発達段階の理解	探索活動が盛んになる、子どもの発達の特徴を知る、手指を使い身の回りのものに働きかける、発達過程や興味・関心を理解する	探索活動が活発になる子どもの発達過程を理解した上で援助をする事故の特徴を知る	子どもの発達過程を理解することで遊びを支える保育者の関わりが重要となる。つまむ、つかむ、引っ張るなどの探索活動を促し、様々な行為を引出す玩具を準備する	上記の認識は手作り玩具製作後に短期間で形成されるのか？

3	学生3	玩具を作るとき何が作れるの だろうと考える時間が長かつ た。もう少したくさん候補 がすぐに出るくらいになれば 保育者になったとき有利だと 考えた。たくさん作って甥っ 子姪っ子が多いのでその子た ちと一緒に遊びたいと思っ た。	何が作れるのか、考え る時間、たくさん候補、 保育者として有、甥っ 子姪っ子、一緒に遊ぶ	子どもの発達に応じた 玩具の製作、手や指先 を使った玩具の種類 の少なさ、保育者として の力量、身近な子ども と遊ぶ中で玩具のどこ に面白さを感じている か知る	子どもの年齢の発育・ 発達を踏まえた玩具、 身近な子どもと接す る、子どもの興味や好 奇心を引出す	子どもとふれあう中で 姿や行為、表現してい るものを理解する。子 どもの発達過程を理解 しそれに基づいた援助 ができるようになり、 興味や好奇心を引出す ことにつながる。	
6	学生6	保育者自身の自然にふれあ う体験を保育に活かすことが できるように、自分が休日に自 然とふれあう機会を増やそう と考えた。自然にふれあう体 験を子どもにたくさんしてあ げられるように、自然とふれ あう活動を考えようと思っ た。	自然にふれあう体験を 保育に活かすことが できる、休日、自然とふ れあう機会を増やす、 自然にふれあう体験、 子どもにたくさんし てあげられる	自分自身が自然体験の 機会を増やす、子ども と一緒に自然にふれあ う機会をたくさんもつ	身の回りにおける自然 の事象に触れる機会をも つ、保育に自然を取り 入れて遊ぶ	保育者自らが身の回り にある自然事象に触れ る機会をもつ。自らの 自然体験を保育に取り 入れて、子どもが直接 自然にふれあう体験を もつことで豊かな感情 や思考力を育むことに つながる。	自然体験の豊かさは保育 者としての資質や指導に どのような影響を与える のか？
11	学生11	私は今回子どもが楽しめるお もちゃ作りを考え手袋シア ターにしましたが、これから 取り組むべき課題はコロナの ことを考えおもちゃを洗っ たりできるほうがコロナの予防 につながるため、いいと思 いました。	子どもが楽しめるおも ちゃづくり、手袋シア ター、コロナのことを 考える、おもちゃを洗 う、コロナの予防	乳児期の子どもの特 性を留意する、玩具の状 態を見て衛生面に気を つける、新型コロナウイルス 感染拡大防止	玩具を衛生面に留意し て清浄・消毒を行う、 新型コロナウイルス感 染症対策	玩具や身の回りのもの をつまむ・つかむ・た たく・引っ張るなどの 手指の操作が巧みに なっていくという子ど もの成長発達を踏ま えた援助が大切である。	
13	学生13	今回おもちゃを製作して自分 の製作技術の低さを知まし た。保育士は製作もたくさん すると思いますのでこれから 色々作って既存のものでなく 自分自身のオリジナリティのあ るおもちゃを作れるくらいに はなりたと思います。なの で自分の課題は製作技術の向 上です。でこれから色々なお もちゃ作りに挑戦してい きたいと思います。	製作技術の低さ、既存 のものを作る、オリジ ナリティのある玩具を 作れるようになる、製 作技術の向上に向けて 色々な玩具作りをする	布を用いた製作にお ける基本的な技術の習 得、目的や使い方に 応じた玩具を製作する	基本的な技術の向上、 素材や大きさなど目的 に応じた玩具製作を実 践する	独創性のある玩具の製 作が困難であったこと から基本的な技術の不 足を認知した。保育士 は子どもが興味をもて るような環境を用意す ることが求められるこ とから、ままごと遊び の玩具など子どもの発 達や目的に合わせた玩 具製作に取り組みたい。	布を使って生活が楽しく なる物をつくった経験が あるか？
15	学生15	保育士になるために手作り玩 具もたくさん作れたほうが いい、ピアノも同じくらい大 事だと思えます。ピアノを今 より上手に弾くために、毎日 ピアノに触れることを目標に 頑張りたいと思います。	保育士、手作り玩具、 ピアノを上手に弾く、 毎日ピアノに触れる、 目標	子どもの発達段階や状 況に合った曲（音楽） を聴く、音の出る玩具 に興味をもつ、音楽に 合わせて身体を揺ら す、歌を歌う	音楽表現を子どもと一 緒に楽しむ、保育者が 楽しそうにリズムに のってピアノを弾いた り歌ったりする、子ど もの多様な表現を引出 すなど実践に活かす	音楽表現を子どもと一 緒に楽しむためにピ アノなどの楽器の演奏 技術を向上させ、子ど もの多様な表現を引出 すなど、実践に活かす ために努力を積み重ね ていきたい。	この記述に関する諸研究 （紙屋ら（2008）「ピ アノによる歌伴奏の効 果」、奥（2007）「保 育者養成と演奏技法」、 赤井（2016）「ピ アノを中心とした「保 育音楽力」の在り方と 養成校の音楽授業に 関する考察」等の知 見は、この分析結果を 説明するか検討する
18	学生18	乳幼児のこどもの発達をし っかり理解し、どのような場 面で危険があり、事故が起 こってしまうのかを予想し、そ うならないためにどんな対策 があるか考え、最悪な事態に なったとしても冷静に対応 できる力をつけていくことが課 題になってくると考える。	乳幼児の発達理解、ど のような場面で危険が あるか、事故が起 こる、予想、対策、最 悪の事態、冷静に対 応できる力	子どもの発達過程、誤 飲や窒息などの事故 未然に防ぐ、事故の リスクの除去、実践 的な訓練	事故発生リスクを軽 減する 不測の事態に備える 保育者が冷静に対 応する	子どもの発達過程を理 解し事故の発生リス クを軽減する取組 みを行う。保育者が 冷静に対応したり不 測の事態に備えるた めに救命処置などの 方法も検討したい。	AEDを使用した心肺蘇 生法等の救急救命訓 練に参加したことはあ るか？

次に、最終的な〈4〉について2つのカテゴリーに分類し、抽出された4つのグループとテーマ・構成概念を表3に示す。

表3 自由記述から抽出されたグループとテーマ・構成概念

グループ	構成概念	テーマ・構成概念
【子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化】		
子どもの発達	発達過程	子どもの発達過程を理解することで遊びを支える保育者の関わりが重要
	興味や好奇心	興味や好奇心を引出すことにつながる
	遊びの援助	子どもの活動が豊かに展開され遊びの援助につながる
	遊びの幅	遊びの幅を広げた玩具であったか反省している
	心地よい感触や手触り	心地よい感触や手触りなど布の特徴を生かした玩具
	手指の操作	つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど手指の操作が巧みになっていく
	ものを介してのやり取り	ものを介してのやり取りが楽しめるような玩具
	指先の力を調整	ひっくり返したりなど握りやすいものや指先の力を調整したりするもの

基 技 術 的 な	意欲や興味	子どもが触りたいという意欲や興味を引出す玩具
	基本的な技術	「縫う」などの基本的な技術が不足、 独創性のある玩具の製作が困難であったことから基本的な技術の不足
事 故 の 発 生 リ ス ク と 衛 生 管 理	玩具の衛生管理	洗浄や洗濯する、子どもは何でも口に入れるため玩具の衛生管理を行う
	予測できる事故	偶発的に発生したものではなく、予測できる事故ととらえる
	事故から守る	子どもを事故から守るために、安全面の配慮や事故を防ぐ対策
	発達段階	子どもの発達段階における成長の特徴を理解し、適切な対応や支援
	新型コロナウイルス感染症対策	新型コロナウイルス感染症対策の取組みとして
	安全面に配慮	子どもの身体的特徴や行動リスクを知ることで安全面に配慮
	事故の発生リスク	事故の発生リスクを軽減する取組み
	不測の事態に備える	冷静に対応したり、不測の事態に備える
【保育者になるための保育技術の習得】		
保 育 技 術 の 習 得	子どもとふれあう	子どもとふれあう中での姿や行為、表現しているものを理解する
	一人一人に応じた関わり	気付く・わかる・できるなど子どもの様子をよく見て、一人一人に応じた関わりをする
	自然にふれあう体験	自然とふれあう体験をもつことで豊かな感情や思考力を育む
	楽器の演奏技術	ピアノなどの楽器の演奏技術を向上させる
	実践に活かす	子どもの多様な表現を引出すなど実践に活かす

そして、すべてのデータを組み入れた概念化の全体像を文章化（富士・名郷、2011）してストーリーラインを作成した。ストーリーラインは【子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化】と【保育者になるための保育技術の習得】の二つのカテゴリーに分類され、文中の下線部は構成概念を示している。

【子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化】

「学生は、子どもに提供する手作り玩具を製作するためには、心地よい感触や手触りがあるもの、手指の操作を促すもの、遊びの幅が広がるものなどが必要であり、子どもの発達過程を理解することが大切だと考えている。それらを用意することで、指先の力を調整したり、ものを介してのやり取りを通して子どもが自ら興味や好奇心をもって環境に関わろうとする遊びの援助が必要だと捉えている。

製作過程においては、子どもの意欲や興味を引出すものを計画していたが、布の特徴を生かした手縫いなどの基本的な技術不足を認識していた。

また、子どもの発達段階に応じて異なる事故の特徴を知ること、誤飲などの予測できる事故については事故の発生リスクを軽減するために環境を見直し、安全面に配慮する必要性を理解していた。子どもを事故から守るという保育者の配慮で防ぎうることは何か、不測の事態に備えるために有効な手段はどのようなことかなど、安全な保育の対策を考える気付きにつながった。特に、新型コロナウイルス感染症対策が求められる現在の状況においては、洗浄や洗濯をするなど適切な玩具の衛生管理を行い感染の拡大を防ぐという意識の高まりがうかがわれた。

【保育者になるための保育技術の習得】

手作り玩具製作後には、一人一人に応じた関わりを学ぶために身近な子どもとふれあう機会を増やすこと、自然にふれあう体験を豊かにすること、楽器の演奏技術を向上させて保育の実践に活かすことなど、自らの体験を保育に活かすための構えや保育者として必要な態度を獲得していると思われる学生がみられた。」

また、上記のストーリーラインから導き出された理論的記述は、以下の通りである（表4）。

表4 ストーリーラインをもとに導き出された理論的記述

理論記述	<p>【子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化】</p> <p>①子どもの発達に合わせた玩具を製作し提供することが必要であると認識している</p> <p>②実際に製作に取り組む過程において基本的な技術不足を認識している</p> <p>③事故発生リスクの軽減や、玩具の衛生管理など安全対策や感染症対策に意識の高まりがみられる</p> <p>【保育者になるための保育技術の習得】</p> <p>子どもとふれあう機会を多くもつ、自然にふれあう体験を豊かにする、楽器の演奏技術を向上させるなど、自らの体験を保育に活かしたいと考えている</p>
------	--

以上のように、一つ目は、【子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化】であり、子どもの発達、基本的な技術、事故の発生リスクと衛生管理として3項目があげられた。二つ目は【保育者になるための保育技術の習得】についてであり、子どもとふれあう機会を多くもち自然にふれあう体験や演奏技術の向上など自らの保育技術の習得として1項目があげられた。さらに学生の自由記述から得られた分析結果をもとに今後の乳児保育の授業の枠組みを概念図（図1）に示した。

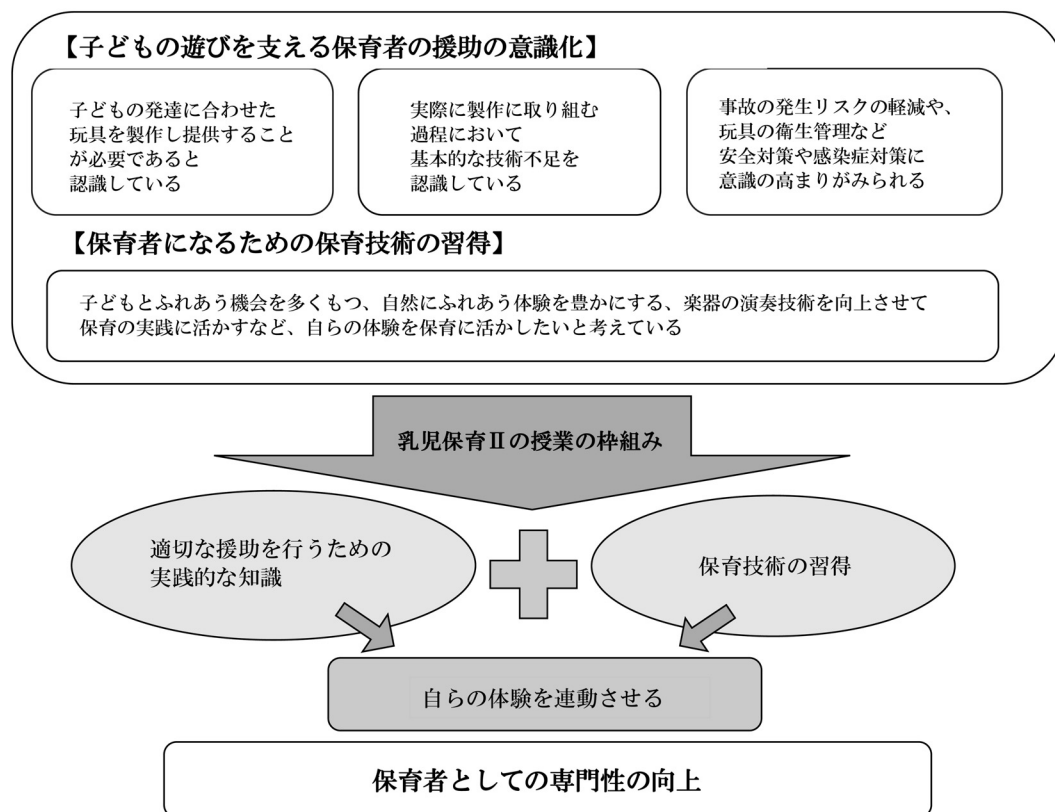


図1 学生の自由記述から得られた今後の授業内容の枠組みの概念図

IV. 考察

1. 手作り玩具製作前後における、「日常的に目にする保護者と乳幼児の姿」「手作り玩具を製作する場合に気をつけたいこと」「保育者として必要な態度」「保育者基礎力」の変化

「日常的に目にする保護者と乳幼児の姿」において、手作り玩具製作前後で有意差があったのは、「A. 乳幼児を持つ保護者の様子を見る機会がある」、「E. 保育所や幼稚園でどのように育てられているか考えることがある」の項目であった。「指定保育士養成施設卒業生の内定先等に関する調査」（全国保育士養成協議会、2020）によると、保育職への就職を目指すことに決めた理由は、「保育者になることが夢だったから」、「資格・免許が取得できるから」、「授業を通して保育の面白さややりがいを感じたから」など、保育を学ぶことの楽しさや学んだことが職業につながるかどうか保育職を選択する動機づけになったと報告されている。手作り玩具を製作する課題に取り組むことにより、日常的な子どもがいる暮らしや、子どもと保護者とのやり取りに目をむける機会が増えたと考えられる。また、子どもが毎日長い時間を過ごす保育所や幼稚園などでどのような保育が展開されているか考える契機になったと思われる。

「手作り玩具を製作する場合に気をつけたいこと」において有意な差がみられなかったことは、手作り玩具を製作する前であっても製作した後であっても、発達が未熟な状態である子どもの保育を行うにあたっては、「探索活動が十分できるように、事故防止に努めながら活動しやすい環境」（厚生労働省、2017）を整え、安全対策を行っていくことが重要であると認識しているためであると考えられる。

「保育者として必要な態度」において、手作り玩具製作前後で有意差があったのは、「A. 使命感をもって子どもと接することができる」、「D. 家事や料理・洗濯など、自らの生活体験を活かした保育を行うことができる」、「E. 保育者自身の豊かな遊び体験を保育に活かすことができる」、「F. 保育者自身の自然にふれあう体験を保育に活かすことができる」の項目であった。「平成 24 年度専門委員会課題研究報告書」（2013）によれば、保育所・児童養護施設・乳児院及び保育者養成施設に保育者として必要な態度がどの時期までに育つことが求められるかを尋ねたところ、A、D、E、F のいずれの項目も「最初の保育実習までに」、「実習を経て卒業までに」の回答の比率が高く比較的早い時期に獲得することが求められていた。保育者として必要な態度は学生のうちから人として関わるうえで、子どもや保護者や同僚保育者に対して向き合うために重要である。手作り玩具を製作するために、子どもが何を楽しんでいるか、意欲が育つためには何が必要かなど、子どもの立場からみるという視点が求められる。上記の項目で変化がみられたことは手作り玩具の製作が影響を及ぼしたといえるだろう。

「保育者基礎力」では、「C. ていねいにきれいな字を書くことができる」、「E. 相手の持つ力を信じ、頼ることができる」、「F. 子どもや他者に寛容さをもって接することができる」の項目において、手作り玩具製作前後で有意な差がみられた。前述の報告書（2013）では、保育者養成施設が中心となって育てていく事項として「C. ていねいにきれいな字を書くことができる」、保育者養成施設で土台をつくり保育現場で学びながら育てていく事項では、「E. 相手の持つ力を信じ、頼ることができる」、「F. 子どもや他者に寛容さをもって接することができる」の項目があげられていた。そもそも、「C. ていねいにきれいな字を書くことができる」の項目は保育者が働く際に求められる基礎的な事項である。現在、学生は本学のディプロマポリシーでも謳われているように、「広く豊かな社会的常識をもち、人間的社会的に成熟している」ことが期待され、「職場や地域社会で社会人として求められる基礎的な能力」（報告書、2013）を身に付けつつあるといえる。そして、「E. 相手の持つ力を信じ、頼ることができる」、「F. 子どもや他者に寛容さをもって接することができる」の項目で変化がみられたことは、実際に手作り玩具を製作したり、乳幼児を持つ保護者の様子を見る機会が増えたりしたことで、「保護者と連携して子どもの育ちを支える視点」（保育所保育指針解説、2018）で見ることにより、「まだ知らない現実が社会にはあるとの認識をもち、想定しない現実を受入れる準備」（上原、2012）が整い、「子育ての日常を支える保育者の役割」（中谷、2013）について向き合おうとしているものと考えられる。

2. 乳児期の子どもの発達を踏まえた手作り玩具製作を通して、これから取り組むべき課題に関する自由記述についての考察

本研究では、20名の学生から得られた「乳児期の子どもの発達を踏まえた手作り玩具製作を通して、これから取り組むべき課題」に対する自由記述（有効回答は18）について、SCAT（大谷、2007・2011）活用法の一つ（富士・名郷、2011）を用いて分析を行い、ストーリーラインをもとに2つの理論記述を導き出した。以下、理論記述として示した【子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化】と【保育者になるための保育技術の習得】について考察する。なお、本文中の「」はテキストデータ、【】は構成概念を意味する。

1) 子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化

(1) 子どもの発達に合わせた玩具を製作し提供することが必要であると認識している

本アンケート調査対象者は、保育士や幼稚園教諭、小学校教諭になるという将来の希望をもち、保育・教育分野の高度な知識や技術を習得したいと願う学生たちである。実際に手作り玩具を製作することにより、「どのような工夫をすることで玩具に興味を持つか」を考え「指先が発達する時期なので、指先の操作を伴う遊びを促すようなもの」（学生1）だけでなく、子どもが喜ぶような玩具の製作にも取り組みたいと意欲をみせている。乳幼児期は、「目と手、右手と左手、指と指などの協応性の発達が著しく、ぎこちない未分化な運動から、滑らかで正確な運動へと分化し、高度に統合された運動が可能となる時期」（橘川、2001）である。保育者の援助や環境構成としては、子どもの【発達過程】を理解することを通して、探索活動が盛んになるような環境を構成することが求められる。今後の課題として、子どもの【発達過程】を踏まえた上で、【興味や好奇心】を引き出す玩具を準備し、遊びを発展させていくためにどのように【遊びの援助】を行い、子どもに関わるか、環境構成はどのようにするのかなど、具体的な子どもへの援助が必要になるであろうと認識しているものと考えられる。

(2) 実際に製作に取り組む過程において基礎的な技術不足を認識している

2017（平成29）年に告示された『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭編』（文部科学省、2017）によれば、家庭生活や社会環境の変化によって家庭や地域教育機能の低下等も指摘される中で、生活の科学的な理解を深め、生活の自立の基礎を培う基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図るために、調理や製作における一部の題材を指定することも考えられると記載されている。「生活を豊かにするための布を用いた製作」に取り組むことを通して、玉結び、なみ縫い、返し縫い、かがり縫いなど針と糸を使って布を縫い合わせることを経験させている（文部科学省検定済教科書、2021）。しかしながら、「今回の手作り玩具製作を通して『縫う』作業があまり得意でないことがわかりました」（学生10）、「今回のおもちゃを製作して自分の製作技術の低さを知りました」（学生13）という記述がみられたことは、生活の中で布を縫う経験の少なさが影響していると考えられる。社会構造や雇用環境が大きく変化する中で、「これまでは家庭の中で経験的に身につけていた生活を営むための基本的な知識や技能が、今日では親から子へと伝達されることが困難になっている」（小林・伊藤、2013）と考えられる。

したがって、子どもが「身の回りの物に触れる中で、形、色、大きさ、量などの物の性質や仕組みに気づく」（厚生労働省、2017）環境を整えるための素材の一つとして、肌触りがよく熱や摩擦にも強く、繰り返し洗濯できる布素材も準備したい。子どもが【意欲や興味】をもって遊べるよう心地よい感触や手触りで握りやすい布製のガラガラやボール、ボタンの留め外しができるものなどを準備し、保育者と関わって遊ぶことで子どもは安定して過ごすことができると考えられる。今回の取り組みを通し、自らの家庭生活との関わりを意識して【基本的な技術】を進んで身に付けようとする態度が育っているものと推察される。

塩谷（2019）が学生が演習で作成したものを持ち寄り、プレゼンテーションを行ったり、実際に子どもたちに使用してもらったりすることで学びが深くなることを記述しているように、自分の製作物だけではなく他の学生の製作物をみたり、保育実習などで子どもが遊んでいる姿を見たりして、次の製作への意欲につながる取組みも検討する必要があると思われる。

(3) 事故発生リスクの軽減や玩具の衛生管理など、安全対策や感染症対策に意識の高まりがみられる

子どもが生活している教育・保育施設では、事故防止のために細心の注意をはらい、その要因を取り除いていくことが求められている。『平成 30 年版消費者白書』（消費者庁、2018）によれば、乳幼児期の子どもは、身体機能が未熟であるため、事故に遭うと大人よりも危険な状態に陥りやすい特徴があり、事故が発生しても被害を最小限にとどめる取り組みを進めていく必要がある。また、子どもは日々成長していくため、ある日突然想定外の動きを始めることがあり、発達段階に応じて注意すべき点が異なることが報告されている。

自由記述の中でも「どのような場面で危険があり、事故が起こってしまうのかを予想し、そうならないためにどんな対策があるか考え、最悪な事態になったとしても冷静に対応できる力をつけていくことが課題になってくる」（学生 18）という記述がみられ、学生は子どもの事故は遊びや生活の場面全てが対象となり得ることを実感していると思われた。事故防止のために「事故が発生する前に保育現場におけるリスクを予測する洞察力を身につけ、リスクを予知」（田中、2006）したり、対策を検討したりすることが必要な課題であると捉えるきっかけになったと思われる。このようなことから、手作り玩具製作をすることを通して、【予測できる事故】については、物を口に入れたり、飲んだりして起こる誤飲・窒息のリスクを少なくするために、玩具の大きさに注意したり、子どもの手の届くところに置かないようにする。【不測の事態に備える】ためには、事故発生時に取るべき行動や態度を身に付けていくことを目指していると考えられる。

一方で、新型コロナウイルス感染症が猛威を奮う中で、今回は手袋シアター作りに取り組んだが、次回は新型コロナウイルス感染症予防につながるよう「コロナのことを考えおもちゃを洗ったりできる」（学生 9）玩具を製作したいという記述もみられた。「乳幼児期が発達上、感染予防行動をとることが難しい特性があり、感染経路が成立しやすい」（西山、2019）ことから、【玩具の衛生管理】について具体的に検討しようとする意識の高まりがうかがわれる。

2) 保育者になるための保育技術の習得

アンケートの対象学生は子どもとふれあう機会を多くもつ、自然にふれあう体験を豊かにする、楽器の演奏を向上させるなど自らの体験を保育に活かしたいと考えている。

加藤（2011）は乳児保育にあたるものはどうあるべきかについて、「保育を進めながら『かわいい』と思え、泣き声に敏感に反応し、子どもの命をしっかりと守り、心を受け止められる。人間性豊かな人に保育を担ってほしい」と述べている。学生は手作り玩具製作過程で手指の操作を要する遊びを楽しむ時期の子どもの発達に即しているものかどうか「たくさんの候補がすぐに出る」（学生 3）くらいになりたい。そのために「甥っ子姪っ子が多いのでその子たちと一緒に遊びたい」と【子どもとふれあう】中で子どもの様子を観察しようと考えている。また、「自然にふれあう体験を子どもにたくさんしてあげられるように」（学生 6）自分の休日に自然とふれあう機会を増やそうと考えたり、「ピアノを今より上手に弾くために、毎日ピアノに触れる」（学生 15）ことを目標にしたいなど、保育実践に必要な保育技術の習得への意欲の高まりがうかがわれた。

保育に当たっては常に安心・安全な環境が望まれるとともに、子どもの好奇心が満たされ体を十分に動かす遊び、

手指を使った遊びなど様々な遊びを取り入れることも求められる。また、保育現場ですぐに実践できるよう折り紙や手遊び、絵本などの種類や内容を知っていることなど、遊びを収集しすぐに提供できることも大切であろう。さらに、自然体験や生活体験、お手伝いといった体験が豊富な子どもほど、自己肯定感や道德観・正義感が高くなる傾向がみられたとする調査結果（国立青少年教育振興機構、2016）もあり、自らの【自然とふれあう体験】を保育に活かすことで、子どもに分かりやすく伝えられる。自らの体験を通して子どもに身近な自然事象への関心を高めようと意図しているものと考えている。さらに、曲の特徴を捉えながら楽しく、弾んだりするなど様々な伴奏をすることで子どもが楽しく歌うことが可能となる。絵本や紙芝居などの内容に合った音・曲などをピアノでグリッサンドやスタッカートで弾いたり、軽快なリズムで表現したりすることでお話のイメージがより広がる。ピアノは幼児教育の音楽活動になくてはならない存在（紙屋・後藤、2008）であり、手作り玩具製作中には気がつかなかった課題に気付き、保育【実践に活かす】ためにピアノなどの【楽器の演奏技術】を向上させるための動機づけになったと思われる。

以上より、手作り玩具製作を通して【子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化】と【保育者になるための保育技術の習得】という課題が明確にされたことから、「乳児保育Ⅱ」の授業では、適切な援助を行うために発達過程の理解の促進を図り実践的な知識を得る、保育技術の習得を図るための授業と学生自らの体験を連動させる必要があると考えられる。

V. 今後の課題

回答期間が短かったことやアンケートの回収方法について課題が残る。「質問紙調査は被験者に負担をかけるのも事実であること」（篠原、2020）から、手作り玩具製作後は学生がそれぞれの作品を持ち寄り、製作過程でうまくできたことや困ったことを提示したり、改善のためのアイデアを提案してもらったりして、次の製作に向けて考える機会をもつことが望まれる。次に、分析の過程で得た疑問や追求すべき課題については、今後検討する必要がある。さらに、保育者として専門性の向上を図るため、発達過程の理解の促進とともに、実践的な知識と保育技術の習得を目指し、授業と学生自らの体験を連動させる「乳児保育Ⅱ」の授業内容の検討が今後の課題である。

VI. 結論

1. 手作り玩具製作前と手作り玩具製作後において、「日常的に目にする保護者と乳幼児の姿」「手作り玩具を製作する場合に気をつけたいこと」「保育者として必要な態度」「保育者基礎力」の変化

手作り玩具製作前とて作り玩具製作後において、有意な差がみられたのは、「日常的に目にする保護者と乳幼児の姿」に含まれる5項目では、「乳幼児を持つ保護者の様子を見る機会がある」、「保育所や幼稚園でどのように育てられているか考えることがある」の2項目であった。また「保育者として必要な態度」に含まれる6項目のうち、「使命感をもって子どもと接することができる」、「家事や料理・洗濯など、自らの生活体験を活かした保育を行うことができる」、「保育者自身の豊かな遊び体験を保育に活かすことができる」、「保育者自身の自然にふれあう体験を保育に活かすことができる」の4項目に有意差がみられた。「保育者基礎力」の6項目では、「ていねいにきれいな字を書くことができる」、「相手の持つ力を信じ、頼ることができる」、「子どもや他者に寛容さをもって接することができる」の3項目に有意な差がみられた。

2. 乳児期の子どもの発達を踏まえた手作り玩具製作を通して、これから取り組むべき課題に関する自由記述について

自由記述を SCAT の手続きに基づいて分析を行い、ストーリーラインをもとに導き出された理論記述は、一つ

目は【子どもの遊びを支える保育者の援助の意識化】であり、①子どもの発達に合わせた玩具を提供することが必要であると認識している ②実際に製作に取り組む過程において基本的な技術不足を認識している ③事故発生リスクの軽減や、玩具の衛生管理など安全対策や感染症対策に意識の高まりがみられるという3項目、二つ目は【保育者になるための保育技術の習得】であり、子どもとふれあう体験を多くもつ、自然にふれあう体験を豊かにする、楽器の演奏を向上させるなど自らの体験を保育に活かしたいと考えているという1項目があげられた。

引用文献

- 福士元春・名郷直樹（2011）「指導医は医師臨床研修制度と帰属意識のない研修医を受入れられていないー指導医講習会における指導医のニーズ調査からー」医学教育，42（2），65-73.
- 紙屋信義・後藤みゆき（2008）「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果ーアレンジによる伴奏を考えるー」東京未来大学研究紀要，第1号，67-75.
- 加藤敏子（2011）「第7章 乳児保育の今後の課題」加藤敏子編集・富永由佳，『乳児保育 一人一人を大切に』萌文書林，176-19.
- 橘川真彦（2020）「3章 どこまで大きくなるのー運動機能と身体の発達」川島一夫編著，『図で読む心理学 発達[改定版]』福村出版，37-48.
- 小林歩・伊藤圭子（2013）「家庭科における子どもの「つまずき」要因の検討ー大学生の学習経験をもとにー」初等教育カリキュラム研究（1），69-79.
- 国立青少年教育振興機構（2018）「青少年の体験活動等に関する実態調査（平成26年度）資料集 調査結果の概要」（平成30年1月29日改訂、平成28年5月2日公表）
<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/107/File/20180129gaiyou.pdf> 1-47.（参照日：2021-8-15）
- 厚生労働省（2017）『保育所保育指針（平成29年告示）』フレーベル館
- 厚生労働省（2018）「保育所における感染症対策ガイドライン（2018年改訂版）」（平成30年3月），
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-119000000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000201596.pdf>
（参照日：2021-8-24）
- 厚生労働省（2017）『保育所保育指針（平成29年告示）』フレーベル館，22.
- 厚生労働省（2017）『保育所保育指針（平成29年告示）』フレーベル館，19.
- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』フレーベル館，328-342.
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編』東洋館出版，17-19.
- 文部科学省検定済教科書（2021）『わたくしたちの家庭科5・6』開隆堂出版株式会社，20-27.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2016）「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」（平成28年3月），https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/kyouiku_hoiku/pdf/guideline1.pdf（参照日：2021-8-24）
- 中谷奈津子（2019）「第8章 子育て支援」古橋紗人子・中谷奈津子編著，『乳児保育Ⅰ・Ⅱ科学的観察力と優しい心』建帛社，150-170.
- 西山里利（2019）「第Ⅱ部第4章 感染症対策」『最新保育士養成校座』総括編纂委員会編，『子どもの健康と安全』全国社会福祉協議会，161-170.
- 大谷尚（2007）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案ー着手しやすい小規模データにも適用可能な理論化の手続きー」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学，54（2），27-44.

- 大谷尚（2011）「質的研究シリーズ SCAT：Step for Cording and Theorization－明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法－」感性工学，10（3），155-169.
- 篠原正典（2020）「質問紙調査法における回答バイアス」佛教大学教育学部論集，第31号，15-31.
- 塩谷香（2019）「参考資料 2-3 具体的な演習事例の展開の仕方」公益財団法人児童育成協会監修，寺田清美・大方美香・塩谷香編集，『乳児保育Ⅰ・Ⅱ』中央法規，361-371.
- 消費者庁（2018）『平成30年版消費者白書』勝美印刷株式会社，94-161.
- 田中哲郎（2006）「第4章 保育園での事故防止」『保育園における危険予知トレーニング』日本小児医事出版社，16-18.
- 上原健二（2012）「児童福祉施設（保育所以外）における保育相談支援」小田豊監修・吉田ゆり・若本純子・丹羽さかの編著，『保育相談支援』光生館，112-123.
- 全国保育士養成協議会（2013）「平成24年度専門委員会課題研究報告書」「保育者の専門性についての調査」－養成課程から現場へとつながる保育者の専門性と育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み－」44-93.
- 全国保育士養成協議会（2020）：指定保育士養成施設卒業生の内定先等に関する調査研究（令和2年3月），
<https://www.hoyokyo.or.jp/R2report.pdf> 109-178（参照日：2021-8-07）

参考文献

- 赤井裕美（2016）「ピアノを中心とした「保育音楽力」の在り方と養成校の音楽授業に関する考察」湖北紀要（39），29-40.
- 富士元春・名郷直樹（2012）「研修医は医療行使をすべきか悩み、誘導する－ポートフォリオ相談事例の質的分析から－」日本プライマリ・ケア連合学会誌，35（3），209-215.
- 丸目満弓（2014）「保護者支援の前提となる保育士と保護者間コミュニケーションに関する現状と課題－保護者アンケートを中心として－」大阪総合保育大学，（9），173-194.
- 永井知子（2018）「若手保育者による「困り感のない保護者」への支援プロセスに関する質的研究 四国大学紀要（A），63-72.
- 内閣府子ども・子育て本部（2020）「令和元年教育・保育施設等における事故報告集計」の公表及び事故防止対策について（令和2年6月26日），
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/r01-jiko_taisaku.pdf（参照日：2021-9-06）
- 奥千恵子（2009）「保育者養成と演奏技法－保育指導としてのピアノ奏法－」四天王寺大学紀要，（48），137-154.
- 全国保育園保健師看護師連絡会（2021）「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック第3版」（2021-07-12），<https://www.hoiku-kango.jp/index.php>（参照日：2021-09-05）